

播磨國風土記

11

484

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始







播磨國風土記

大正  
10 8.29  
内交



自序

我國に於ける最古の國史は古事記で、又最古の地方誌は風土記である、前者は元明天皇の和銅五年に、後者は同六年に、共に朝廷の編纂に係る最も權威ある書籍である。

前者のことは暫らく惜き、後者風土記は當時畿内七道の諸國に命じて其國の古傳、物産、地勢等を記して上らしめたものであるが、此權威ある書籍も歲月の久しきに亘つて、其間種々の災害に遇つた爲め、今は唯だ播磨、常陸、出雲、肥前、豊後の五個國が僅に篤志家の手に仍つ



て寫本として傳へられて居る斗りである、而も此五ヶ國中出雲、肥前、豊後の三ヶ國は當時編纂のものが残つて居るのではなく、此れは天平五年編纂のもので、眞に當時のものと言へば播磨、常陸の二ヶ國に過ぎないのである。

私共は此權威ある書籍が如斯埋れて居ることは、我國々文界の恨事であり、殊に我播磨の記の現存せらるるも係はらず、播磨人士が之れに一瞥だに呉れないのは、己が郷土に對して余りに不忠實ではないかと思つたので、爰に其微力と其淺學とを顧みないで、播磨國風土

記刊行會を起して之れが刊行を企てたのである。

乍然私共は元々文士でもなければ史家でもない、加ふるに淺學にして寡聞である、故に本書刊行の如きも所謂盲人蛇に怯ちず式にやつたのであるから、編輯の粗漏、考證の杜撰は到底免れ難く、徒に自己の無學を活字にして暴け出し、世人の嘲笑を買ふに過ぎないのであるが、若し幸にも、湖史家の高教と叱正とを得て、幾分我郷土に盡す所があつたならば實に欣快の至りである。

終に臨み本書刊行に際し贊助を與へられたる愛郷諸



氏、及び其上梓の始終に亘つて多大の後援を仰いだ福  
本活版所主吉田氏の芳志を深く謝するのである。

大正拾年七月

於笠峰西麓 魁堂 識

一本書は元來轉々手寫して來たものであるから其手寫の際或は脱字或は誤  
記を生じ、それを其儘次ぎから次ぎに傳へた爲め、辭句の上に於て又意  
義の上に於て所々不徹底の点あるは甚だ遺憾の至りである。

一本書の句讀点、假名及び現今との對照は本會で附けたものであるから、從  
つて誤りの多いことは免れ難いのである、故に讀者諸君の正確なる訂正  
を切に望むのである。

一本書中赤穂明石の二郡を逸しておるのは何故か、今詳かに知ることを得  
ないのは實に残念である。「最も延喜民部式には大管十二郡と即ち和名類  
聚鈔には赤穂、明石の二郡を合せて十二郡を擧げておる」



賀古郡

望覽四方云、此土丘原野甚廣大、而見此丘如鹿兒、故名曰賀古郡。狩之時一鹿走登於

此丘、其聲比比故號曰岡。此岡有比禮墓坐神

大御津齒命子伊波都比古命所以號褶墓者、昔大帶日子命詔印

南別孃、之御佩刀之八咫劍之上結爾、八咫

勾下結爾、麻布都鏡、繁時、賀毛郡山直等始

祖息長命一名伊志治為媒人、詔下行之時、到攝津

國高瀨之濟、請欲度此河、渡子紀伊國人小

玉申曰、我為天皇贊人否、爾時勅云、朕公雖





然猶度、度子對曰、遂欲度者宜賜度賃、於是  
即取爲道行儲之弟、フナトキ縵投入舟中、則縵光明  
炳然滿舟、度子得賃及度之、故云朕若濟、遂  
到赤石郡。廝御井、供進御食故曰廝御井。爾  
時印南別嬢、聞而驚畏、之即遁度於南毘都  
麻嶋、於是天皇乃到賀古松原、而覓訪之、於  
是白犬向海長吠、天皇問云是誰犬乎、須受  
武良首對曰、是別嬢所養之犬也、天皇勅云、  
好告哉、故號告首、乃天皇知在於此少嶋、即  
欲度到阿閉津、供進御食、故號阿閉村。又捕

江魚、爲御杯物、故號御杯物、故號御杯江。又  
乘舟之處、以楛作榭津、遂度相遇、勅云、此嶋  
隱愛妻、依號南毘都麻。於是御舟與別嬢舟  
同編合而楸杪挾伊志治、爾名號大中伊志  
治。還到印南六繼村、始成密事、故曰六繼村。  
勅云、此處浪響鳥聲甚譁、南遷於高宮、故曰  
高宮村。是時造酒殿之處、即號酒屋村。造贊  
殿之處、即號贊田村。造宮之處、即号館村。又  
遷於城宮田村、依始婚成也。以後別嬢掃床  
仕奉、出雲臣比須良比賣、給於媒人息長命、



墓有賀古驛西。有年別嬢薨於此宮、即作墓於日岡而葬之、舉其屍度印南川之時、大飄自到下來、纏入其屍於川中、求南不得、但得匣與褶、即以此二物葬於其墓、故號褶墓。於是天皇戀悲誓云、不食此川之物、由此其川年魚不進御贄、後得御病、勅云、者藥也、即造宮於賀古松原而還。或人於此堀、出冷水、故曰松原御井。

賀古郡。即ち現今の加古郡の地、其日岡は水丘村字大野日岡にして比禮墓は景行天皇(諱大帶彥忍別尊)の皇后播磨稻日大郎媛命(印南別嬢)を葬れる水丘御陵を指す。

阿開津今の阿開別府の海濱にして御杯江は別府村字細江なりと、加古松原尾上村字口里の東に在る濱の宮松原之れなり、又南昆都麻嶋は高砂荒井にして則ち加古川(本書の印南川)の河口に當る地を指したるものなり。

望理里土中 大帶日子天皇巡行之時、見此村川曲、勅云、此川之曲甚美哉、故曰望理。

望理里。現今に於ける印南郡國包村及び加古郡八幡村、神野村にして加古川の流れに沿へる地方なるべく、此川とは加古川を言ひたるものなるべし。

鴨波里土中 昔大部造等始祖、古理賣、耕此之野、多種粟、故曰粟々里。此里有舟引原、昔神前村有荒神、毎年留行人舟之村、於是往



來舟之悉留、印南之大津江、上於川頭、自賀、  
意理多之谷、川出而通出於赤石郡林潮、故  
曰舟引原。又事與上解同。

鴨波里。現今の二見村阿開村を指したるものの如く、又赤石郡林潮  
云々は明石郡林崎村にはあらざるかと云ふ説あれども今  
適確なる考證を得ず。

長田里土中 昔大帶日子命、幸行別媛之處、  
道邊有長田、勅云、長田哉、故曰長田里。

長田里。現今の尾上鳩里の兩村にして尾上村には長田、安田等の大  
字を存す。

驛家里土中 由驛家爲名。

驛家里。是れ現今の加古川町にして、同地は往時より中國街道の驛  
路に當りたるものなるべし。

印南郡

一家云、所以號印南者、穴門豐浦宮御宇  
天皇、與皇后俱、欲平筑紫久麻曾國、下行之  
時、御舟宿於印南浦、此時滄海甚平、風波和  
靜、故名曰入印南浪郡。

印南郡。現今の所謂印南郡にして、又穴門豐浦宮天皇とは仲哀天皇  
にして天皇は即位二年の九月、皇后と共に長門與宮に幸す、  
之れを穴門豐浦宮と號す。

大國里土中 所以號大國者、百姓之家多居



此、故曰大國。此里有山、名曰伊保山。所以號帶中日子命乎、坐於神、而息長帶日女命率石作連來而、求讚伎國羽若石也、自彼度賜、未定御廬之時、人來見顯、曰美保山。山西有原、名曰池之原、原中有池、故曰池之原。原南有作石形如屋、長一丈廣一丈五尺高亦如之、名號曰大石。傳云、聖德王御世、弓削大連所造之石也。

大國里。現今の伊保村、曾根村、米田村、阿彌陀村、西神吉村地方にして西神吉村には大國の大字を存す、然れども當時の大國里は主として伊保、曾根、米田、阿彌陀等の龍山四面の地を指すに

似たり。

池之原、阿彌陀村大字北池南池にして、大石は彼の有名なる石寶殿なりとす。

六繼里土中 所以號六繼里者、已見於上。此里有松原、生甘藪、色似藪花、體如鶯藪、十月上旬生、下旬亡、其味甚甘。

六繼里。現今の大鹽的形地方にして其六繼の起因は加古郡の條に於て明なり。

益氣里土上 所以號宅者、大帶日子命、造御宅於此村、故曰宅村。此里有山、名曰斗形山以石作升與乎氣、故曰升形山。有石橋、傳云



上古之時、此橋至天、八十人衆、上下往來、故曰八十橋。

益氣里。現今の東神吉村及び平莊村にして東神吉村には大字升田の地在り、又天八十橋は升田村の民家の後方に在る一丘を指すと云ふ。

含藝里本名瓶落土中上、所以號瓶落者、難波高津官御世、私部局取等遠祖、他田熊子、瓶酒着於馬尻、求行家地、其瓶落於此村、故曰瓶落。又酒山者、大帶日子天皇御世、酒泉涌出、故曰酒山。百姓飲者、即醉相鬪相乱、故令埋塞、

後庚午年有人、堀出、于今猶有酒氣、郡南海中有小嶋、名曰南毘都麻。志我高穴穗宮御宇天皇御世、遣丸部臣等始祖、比古汝弟、令定國堺、爾時吉備比古吉備比賣、二人參迎、於是比古汝弟、娶吉備比賣、生兒印南別嬢、此女端正、秀於當時、爾時大帶日子天皇、欲娶此女、下幸行之、別嬢聞之、即遁度件嶋、隱居之、故曰南毘都麻。

含藝里。是れ現今の神吉村及び志方村地方にして、其南毘都麻は前に説明せし如く高砂町及荒井村等とす、而して東神吉村には神吉の大字今尙存在す。



又難波高津宮とは仁徳天皇にして志我高穴穗天皇とは景行天皇にまします、即ち天皇は即位六十年の冬十一月近江國滋賀高穴穗の宮に崩御さる。

飭磨郡

所以號飭磨者、大三間津日子命、於此處造屋形而坐時、有大鹿而鳴之、爾時王勅曰、牡鹿鳴哉、故號飭磨郡。

飭磨郡。現今の飾磨郡にして當時は一郡なりしも後別れて飾東、飾西の兩郡となりしも近時合併して再び飾磨郡となる。  
又大三間津日子命とは孝昭天皇にして、其屋形の跡は飾磨郡城北村八代に存在す。

漢部里土中 右稱漢部者、讚藝國漢人等到

來、居於此處、故號漢部。

漢部里。現今の余部村の地とす。

菅生里土中 右稱菅生者、此處有菅原、故號

菅生麻跡里土中 右號麻跡者、品太天皇巡

行之時、勅云見此二山者、能似人眼割下、故號目割。

菅生里。今の菅野村にして、菅生の大字を存す。  
麻跡里。確たる考證なきも現今に於ける八幡村の地を指したるが如しと云ふ者あり。

英賀里土中 右稱英賀者、伊和大神之子、阿賀比古阿賀比賣二神、在於此處、故因神名



以為里名。

英賀里。現今の英賀保村にして大字英賀の地あり。

伊和里 舟丘、波丘、琴丘、匣丘、箕丘、日女道丘、 土中上、右號

伊和部者、積シ嶠カ郡伊和君等族、到來居於此

故號伊和部。所以號手荊丘者、近國之神到

於此處、以手荊草、以為食薦、故号手荊。一云、

韓人等始來之時、不識用鎌、但以手荊稻、故

云手荊村。右十四丘者、已詳於上。昔大汝命

之子、火明命、心行甚強、是以父神患之、欲遁

棄之、乃到因達神山、遣其子汲水、未還以前、

即發船遁去、於是火明命、汲水還來、見船發

去、即大瞋怒、仍起風波、追迫其船、於是父神

之船、不能進行、遂被打破、所以其波丘。琴落

處者、即號琴神丘。箱落處者、即號箱丘。梳匣

落處者、即號匣丘。箕落處者、仍號箕形丘。甕

落處者、仍日甕丘。稻落處者、仍號稻牟禮丘。

冑落處者、即號冑丘。石落處者、即號沈石丘。

網落處者、号藤丘。鹿落處者、即號鹿丘。犬落

處者、即号犬丘。蚕落處者、即号日女道丘。爾

時大汝神、謂妻努都比賣曰、為遁惡子、返遇



風波、被太辛苦哉、所以號曰曠鹽、曰告齊。

伊和里。現今の荒川村、手柄村、姫路市等にして其手柄丘は手柄村に當り、日女道丘は今姫路城の在る所とす。又波丘、琴丘、其他の諸丘は姫路附近に散在せる丘阜にして、伊達神山は今の書寫山ならんと云ふ者あり。

賀野里幣土中上、右稱賀野者、品太天皇巡行之時、此處造殿、仍張蛟屋、故號賀野、山川之名亦與里同。所以稱幣丘者、品太天皇到於此處、奉幣地祇、故號幣丘。

賀野里。現今の鹿谷村を指し、字坂根には賀野神社あり。又品太天皇とは應神天皇にして、天皇は諱を譽田別尊と稱せしかば後世之れを品太天皇と申しさ。

韓室里土中、右稱韓室者、韓室首寶等上祖、家大富饒、造韓室、故号韓室。

韓室里。現時の曾左村、高岡村に當るが如しと云ふ。

巨智里草上村大立丘、土上下、右巨智等、始屋居此村、故因爲名。所以云草上者、韓人山村等上祖、作臣智賀那、謂此地而墾田、之時有一聚草、其根尤臭、故號草上。所以稱大立丘者、品太天皇立於此丘、見之地形、故號大立丘。

巨智里。現今の置鹽村及安室村等にして置鹽村には古知之庄の大宇あり、又大立丘は安室村御立に非らざるかと云ふ史家あり。



安相里長畝川土中中、右所以號安相者、品太  
天皇從但馬巡行之時、緣道不徹御冠、故號  
陰山前、仍國造豐忍別命、被蒙名、爾時但馬  
國造、阿朝尼命申給、依此赦罪、即奉鹽代田  
廿代、有名鹽代田飼、但馬國朝來郡人到來、  
居於此處、故号安相里。本名阿沙部。云後里  
名依、改字二字注為安相里。所以號長畝川  
者、昔此川生蒔、于時賀毛郡長畝村人、到來  
蒔蒔。爾時此處石作連等、為奪相鬪、仍殺  
人、即捉棄於此川、故號長畝川。本又阿朝尼

命、娶英保村女、卒於此村、遂造墓葬、以後正  
骨運持去之云來。

安相里。現今の八木村、白濱村、妻鹿村等の地にして、其長畝川と云ふ  
は八木村にある芋川にはあらざるかと云ふ者あり。

枚野里新羅訓村宮岡右稱牧野者、昔為少野、故號枚  
野。所以號新羅訓者、昔新羅國人、來朝之時。  
宿於此村、故號新羅訓山名。所以稱宮岡者、  
大汝少日子根命、與日女道丘神、期會之時、  
日女道神、於丘備食物及筥器等、其故號筥  
丘。

枚野里。今の城北村水上村の地にして、其新羅訓は白國に當り又城  
北村平野は即ち枚野の里の名を殘せるものとす。



大野里砥堀土中中、右稱大野者、本爲荒野、故号大野。嶋宮御宇天皇之御世、村上足嶋等上祖、惠多志貴、請此野而居、之及爲里名。所以稱砥堀者、品太天皇之世、神前郡與飭磨郡之堺、造大川岸道、是時砥堀出、故號砥堀于今猶在。

大野里。現今の水上市及び神崎郡砥堀附近にして、其砥堀は中世神崎郡に属すと雖、往古は飾磨郡の地たりしが如し。  
又嶋宮天皇とは欽明天皇にして、天皇は即位元年の秋都を大和敷嶋之宮に遷さる、仍て是れを敷嶋宮天皇と稱す。

少川里 高瀬村、豊國村、英馬野、射目前、壇坂、多取山、御立丘、伊刀嶋 土中中 本名私里 右号

私里者、志貴嶋宮御宇天皇世、私部弓束等祖、田久利君、留請此處、而居之、故號私里。以后庚寅年、上大夫爲宰之時、改爲少川里。一云小川自大野流來此處、故曰小川、所以稱高瀬者、品太天皇、登於夢前丘、而望見者北方、有白色物云、彼何物乎、即遣舍人上野國麻奈毘古、令察之、申云、自高處流落水是也、即號高瀬村。所以號豐國者、筑紫豐國之神、在於此處、故號豐國村。所以號英馬野、爲品太天皇此野狩時、一馬走逸、勅云、誰馬乎、待



從等對云、朕御馬也、即號我馬野。是時立射  
目之處、即號射目前。弓折之處、即號檀丘。御  
立之處、即號御立丘。是時大牝鹿、泳海就嶋、  
故號伊乃島。

少川里。現今の花田、谷内、谷外の地にして花田村には小川の大字あり。

豐國村、谷外村豐國の地に相當し其英馬野、射目前、檀丘及び御立丘等の地は今判明し難し

英保里土中右稱英保者、伊豫國英保村人、  
到來居於此處、故號英保村。

英保里。現今の姫路市外城南村の地にして同村には大字阿保の地あり

美濃里繼潮土中中、右號美濃者、讚岐國彌  
濃郡人、到來居之、故號美濃。所以稱繼潮者、  
昔此國有一死女、爾時筑紫國大君等祖不知  
到來復生、仍娶之、故號繼潮。

美濃里。今の糸引村、四郷村の地方にして、四郷村大字見野は美濃に當り、糸引村繼は繼潮の地に相當す

目達里土中右稱目達者、息長帶比賣命、欲  
平韓國渡坐之時、御船前、伊太代之神、在於  
此處、故因神名以爲里名。

目達里。現今の書寫山附近を指したるものにあらさるか云ふ



安師里土中 右稱安師者、倭穴無神、神戸託  
仕奉、故號穴師。

安師里。現今の高濱村を初め飾磨町に至る地方にして高濱村阿成  
は安師の轉訛したるものとす。

漢部里多志野阿比野手沼川 里名詳於上。右稱多志野者、  
品太天皇狩之時、以鞭指此野、勅云、彼野者、  
宜造宅及墾田、故號佐志野、今改號多志野。  
所以稱阿比野者、品太天皇從山方、幸行之  
時、從臣等、自海方參會、故號會野。所以稱手  
沼川者、品太天皇於此川洗御手、故號手沼

川生年魚味。貽和里船丘北邊、有馬墓池、昔大長  
谷天皇御世、尾治連等上祖、長日子有善婢  
與馬、並合之意、於此處長日子將死之時、謂  
其子曰、吾死以后皆葬准吾、即爲之作墓、第  
一爲長日子墓、第二爲婢墓、第參爲馬墓、併  
有三、後上生石大夫、爲國司有之時、筑墓邊  
池、故因名爲馬墓池。

漢部里。此里の細書多志野は今分明ならずと雖も或は高岡村手野  
にあらすやと云ひ、又手沼川とは夢前川にして會野は余部  
村青山にてはなきやと云ふ者あり。

馬墓池。現今の姫路市西郊にある男山の地(同山は一名妹脊山の稱



ありならんと云ふ  
大長谷天皇とは雄略天皇にして、天皇は諱を大泊瀬尊と申す、仍て之れを大長谷天皇と稱す。

所以稱飭磨御宅者、大雀天皇御世、遣人喚意伎出雲伯耆因幡但馬五國造等、是時五國造即以召使、爲水手、而向京之、以此爲罪、即退於播磨國令作田也、此時所作之田、即號意伎田、出雲田、伯耆田、因幡田、但馬田、即彼田稻收納之御宅、即號飭磨御宅、又云賀和良久三宅。

御宅村。現今の高濱村三宅の地を指したるものなるべし。

又大雀天皇とは仁徳天皇にして、天皇は諱を大鷦鷯尊と申せしに仍り時人之を大鷦鷯天皇と稱しき。

揖保郡

揖保郡、事明下。伊刀嶋、諸嶋之總名也、品太天皇立射目人、於飭磨射目前爲狩之、於是自我馬野出牝鹿、過此阜入於海、泳渡於伊刀嶋、爾時翼人等、望見相語云、鹿者既到就於彼嶋、故名伊刀嶋。香山里本名鹿來墓土下上、所以號鹿來墓者、伊和大神占國之時、鹿來立於山々岑々、是又似墓、故號鹿來墓。後至道



守臣爲宰之時、乃改名爲香山。家内谷、卽是香山之谷、形如垣廻、故號家内谷。佐々村、品太天皇巡行之時、猿囓竹葉而過之、故曰佐々村。阿竺村、伊和大神巡行之時、告其心中熱而、控絶衣衽、故號阿竺。一云昔天有二星落於地化爲石、於此人衆、集來談論、故名阿竺。飯盛山、讚伎國宇達郡飯神之妾、名曰飯盛大刀目、此神度來、占此山而居之、故名飯盛山。大鳥山、鶴栖此山、故名大鳥山。

揖保郡。現今の揖保郡にして中世分れて揖東揖西の兩郡となりし

も明治廿九年合して亦一郡となる。

伊刀嶋。是れ飾磨郡家嶋群嶋の総稱にして同嶋は今飾磨郡に属すと雖、往古は揖保郡に属したるものと思はる。

香山里。香山は現今の香嶋村と稱するの地にして同村大字には香嶋の名存し佐々村は下笹上笹となりて存す。

栗栖里<sub>中土中</sub> 所以名栗栖者、難波高津宮天皇、勅賜刊栗子、若倭部連池子、卽將退來、殖生此村、故號栗栖。此栗子由本刊、後无澁廻川金箭川、品太天皇巡行之時、御前金箭、落於此川、故號金箭。阿爲山、品太天皇之世、紅草生於此山、故號阿爲山。住不知名之鳥、起



正月至四月見、五月以後不見、形似鳩色如紺。

栗栖里。現今の東西栗栖村にして、其金箭川は西栗栖村に鍛冶屋の大字を止む。

越部里催部里土中中所以號皇子代者、勾宮天皇之世、竊人但馬君小津、蒙寵賜姓、爲皇子代君、而造三宅於此村、令仕奉之、故曰皇子代村。後至上野太夫、結卅戶之時、改號越部里、一云、自但馬國三宅越來、故號越部村。鷓住山、所以號鷓住者、昔鷓多住此山、故目

爲名。擱坐山、石似欄、故號擱座山。御橋山、大汝命積俵立橋、岩似橋、故號御橋山。狹野村、別名玉手等遠祖、本居川内國泉郡、因地不便、遷到此土、仍云此野雖狹、猶可居也、故號狹野。出雲國阿菩大神、聞大倭國畝火香山耳梨三山相鬪、此欲諫止、上來之時、到於此處、乃聞鬪止、覆其所乘之船、而坐之、故號神阜、阜形似覆。

越部里。現今の越部村、新宮村の地にして其狹野村は越部村佐野の古名とす。  
擱座山、御橋山は嘴崎附近の山の名にてはあらざるかと云



ふ者あれども今直ちに首肯することを得ず。又勾宮天皇とは安閑天皇にして天皇は諱を勾大兄皇子と稱し、即位元年正月都を勾金橋宮に遷す仍つて是れを勾宮天皇と申す。

上岡里本林土中下菅生山邊、故曰菅生。一云品太天皇巡行之時、關井此岡、水甚清寒、於是勅曰、由水清寒、吾意宗我宗我志、故曰宗我富。殿岡、造殿此岡、故曰殿岡。

上岡里。現今の神岡村の地を指したるものなるべく、又新宮村大字に曾我井の地あり、當時此邊亦上岡の里にして關井の所は此處にあらざやと云ふ者あり

日下部里因人名土中中立野、所以號立野者、

昔土師努美、宿禰、往來於出雲國、宿於日下部野、乃得病死、爾時出雲國人來到、連立人衆、運傳上川礫、作墓山、故號立野、即號其墓屋、爲出雲墓屋。林田里本名土中下所以稱談奈志者、伊和大神占國之時、御志植於此處、遂生榆樹、故詳名談奈志。松尾阜、品太天皇巡行之時、於此處日暮、即此取阜松、爲之燎、故名松尾。搗阜、惟阜之南有水、方三丈許、與海相通、潤卅里許、以礫爲底、以草爲邊、與海水同往來、滿時深三寸許、牛馬鹿等嗜



而飲之、故號鹽阜。所以伊勢野者、此野每在人家、不得靜安、於是衣縫猪手、漢人刀良等祖、將居此處、立社山本敬祭、在山岑神、伊和大神子、伊勢都比古命、伊勢都比賣命矣、自此以後、家々靜安、遂得成里、即號伊勢伊勢川、因神名爲名。稻種山、大汝命少日子根命、二柱神、在於神前郡聖岡里生野之岑、望見此山云、彼山者當置稻種、即遣稻種積、於此山山形亦似稻積、故號曰稻積山。邑智驛家<sub>土中</sub>品太天皇巡行之時、到於此處、勅云、

吾謂狹地、此乃大内之乎、故號大内。氷山、惟山東有流井、品太天皇汲其井之水、而氷之故號氷山。槻折山、品太天皇狩於此岡、以槻弓射走猪、即折其弓、故曰槻折山。此山南有石穴、穴中生蒲、故號蒲阜、蒲至今不生。

日下部。現今の揖西村附近にして大字土師は土師野見宿禰に因める地、而して同地の鶏塚と云ふは即ち野見宿禰の墓なりと云ふ史家あり、然れども本書立野の起因を努美宿禰に採り、今亦龍野町に努美宿禰の墓あるを見れば或は當時此附近を日下部里と呼びしにはあらざるか。

林田里。是れ今の林田村にして、又伊勢野は即ち伊勢村を指し伊勢川は大津茂川の上流とす。邑智驛家。現今の大市村にし太市中は往時の邑智驛家の中心地と



す

廣山里舊名土中所以名都可者、石比賣命、立於泉里、波多爲社、而射之、到此處、箭盡入地、唯出握許、故號都可村、以後石川王、爲總領之時、改爲廣山里。麻打里、昔但馬國人、伊頭志君麻良比家、居此山、二女夜打麻、即置於己胸死、故號麻打山、于今居此邊者、至夜不打麻矣。

俗人云、讚伎國意比川、品太天皇之世、出雲御蔭大神、坐於枚方里神尾山、每遮行人、半

死生、爾時伯耆人小保豆因幡布久漏、出雲都伎也三人相憂、申於朝廷、於是遣額田部連久等々令禱、于時作屋形於屋形田、作酒屋於佐々山而祭之、宴遊甚樂、即採山柏、掛帶挿腰、下於此川相壓、故號壓川。

廣山里。現今に於ける譽田村にして同村には廣山の大字を存す

枚方里土中所以名枚方者、河内國茨田郡枚方里、漢人來到、始居此村、故曰枚方里。佐比岡、所以名佐比者、出雲之大神、在於神尾山、此神出雲國人經過此處者、十人之中



死五人、五人之中死三人、故出雲國人等、作  
佐比祭於此岡、遂不和受所以然者、比古神  
先到、比賣神後來、此男神不能鎮、而行去之、  
所以女神怨怒也、然後河內國茨田郡枚方  
里漢人、來至居此山邊、而敬祭之、僅得和鎮、  
因此神在、名曰神尾山。又作佐比祭處、即號  
佐比岡。佐岡、所以名佐岡者、難波津宮天皇  
之世、召筑紫田部、令墾此地之時、常以五月、  
集聚此岡、飲酒宴、故曰佐岡。大見山、所以名  
大見者、品太天皇登此山嶺、望覽四方、故曰

大見。御立之處有盤石、高三尺許、長三丈許、  
廣二丈許、其石面徃々有窪跡、此名曰御沓  
及御杖之處。三前山、此山前三、故曰三前  
山。御立阜、品太天皇登於此阜、覽國、故曰御  
立岡。

枚方里。現今の龍田村にして同村小字平方は枚方の地、其佐用岡は  
佐岡の轉訛なるべし。

大、家、里 舊名 大宮村 土中上品太天皇巡行之時、營  
宮此村、故曰大宮。後至田中太夫爲宰之時、  
改大宅里。



大家里。斑鳩村の地なるべしと言ふ

大法山今勝部岡名品太天皇於此山宜大法、故曰  
大法山。今所以號勝部岡者、小治田河原天  
皇之世、遣大倭千代勝部等、令墾田、即居此  
山邊、故號勝部岡。上筥岡、下筥岡、魚戶津、初  
田、宇治天皇之世、宇治連等遠祖、兄大加奈  
志、弟大加奈志二人、請大田村、與富等地墾  
田將蒔來時、斫人以初荷食具等物、於是初  
折荷落、所以奈閉落處、即號魚戶津。前筥落  
處即名上筥岡。後筥落處即曰下筥岡。荷初

落處即曰初田。

大法山。此地今不明なれども、鵜の南に當る立岡は或は此勝部岡に  
あらざるかと云ふ史家あり。  
又小治田河原天皇とは推古帝にして、天皇は即位三十六年  
の三月小治田の宮に於て崩御さる。

大田里土中所以稱大田者、昔吳勝、從韓國  
度來、始到於紀伊國名草郡大田村、其後分  
來移倒攝津國三嶋賀美郡大田村、其又遷  
來於揖保郡大田村、是本紀伊國大田所以  
名也。言學阜、右所以稱言學阜者、大帶日賣  
命之時行軍之日、御於此阜、而教令軍中日



此御軍者慙慙、勿爲言舉、故號曰言舉前。鼓山、昔額田部連伊勢、與神人腹太夫相闘之時、打鳴鼓而之、故號曰鼓山、山谷生檀。

大田里。現今の大田村にして同村には大字大田の地を存す

石海里土惟上中 右所以稱石海者、難波長柄豐前天皇之世、是里中有百便之野生百枝之稻、即阿曇連百足、仍取其稻獻之、爾時天皇勅曰、宜墾此野作田、乃遣阿曇連大牟、召石海人、夫令墾之、故野名曰百便、村號石海也。酒井野、右所以稱酒井者、品太天皇之

世、造宮於大宅里、鬪井此野、造立酒殿、故號酒井野。宇須伎津、右所以名、宇須伎者、大帶日賣命、將平韓國度行之時、御船宿於宇伎頭川之泊、自此泊度行、於伊都之時、忽遭逆風、不得進行、而從船越、越御船、船猶亦不得進、乃追發百姓、令引御船、於是有一女人、爲資上、己之負子而墮於江、故號宇須伎。新辭伊波須久。宇頭川、所以稱宇頭川者。宇須伎津西方、有紋水之淵、故號宇頭川。卽是大帶日賣命宿船之泊。伊都村、所以稱伊都者、御船



水手等云、何時將到、於此所見之手、故曰伊都。雀嶋、所以號雀嶋者、雀多聚於此嶋、故曰雀嶋、不生草木。

石海里。現今の石海村に當り余部村旭陽村網干町の地之れに屬したるが如く、亦伊都村は御津村伊都(岩見)を指すものに似たり。

難波長柄豊前天皇とは孝徳天皇にして天皇即位二年の十月二月都を難波長柄豊前宮に遷さる。

浦上里土上中右所以號浦上者、昔阿曇連百足等、先居難波浦上、後遷來於此浦上、故因本居爲名。御津、息長帶日賣命、宿御船之泊、

故號御津。室原泊、所以號室者、此泊防風如室、故因爲名。白貝浦、昔在白貝、故因爲名。家嶋、人民作家而居之故號家嶋、生竹黒葛等神嶋、伊刀嶋等、所以稱神嶋者、此島西邊在石神、形似佛像、故因爲名此神、顏有五色之玉、又胸有流淚、是又五色、所以泣者、品太天皇之世、新羅之客來朝、仍見此神之奇偉、以爲非常之珍玉、屠其面色、掘其一瞳、神由泣、於是大怒、即起暴風、打破客船、漂沒於高嶋之南濱、人悉死亡、乃埋其濱、故號曰韓濱。于今過其



處者、慎心固、或不言韓人、不拘盲事。韓荷嶋、韓人破船、所漂之物、漂就於此嶋、故號韓荷嶋。高嶋、高勝於當處嶋等、故號高島。萩原里土中右所以名萩原者、息長帶日賣命、韓國還上之時、御船宿於此村、一夜之間生萩、根高一丈許、仍名萩原。即關御井、故云針間井。其處不墾、人罇水溢成井、故號韓清水。其水朝汲不出朝、爾造酒殿、故云酒田。船傾乾、故云傾田。春米女等陰、陪從婚斷、故云陰絕田。仍萩多榮、故云、萩原也、爾祭神少是

命坐。鈴喫岡、所以號鈴喫者、品太天皇之世、田於此岡、鷹鈴墮落、求而不得、故號鈴喫岡。

浦上里。現今の河内村御津村、室津村の地にして本書の所謂御津は御津村にして室原泊は室津村室津港に相當す。家嶋是れ家嶋群嶋中の最大なる家嶋を指したるものにして、又神嶋は同群島中の一島嶼とす。韓荷島室津港の前方に点在せる地韓荷、中韓荷沖韓荷の三嶋を指す。

萩原里。揖保村大字萩原は此萩原里の地なるべしと云ふ。

少宅里本名土中下所以號漢部者、漢人居之此村、故以為名。所以後改曰少宅里者、川原若狹祖父、娶少宅秦公之女、即號其家小



宅後若狹之孫、智麻呂住爲里長、由此庚寅年、爲少宅里。細螺川、所以稱細螺川者、百姓爲田關溝、細螺多在此溝後終成川、故曰細螺川。

小宅里。今の小宅村にして同村又小宅の大字を在す。

揖保里土中所以稱粒者、此里依於粒山、故因山爲名。粒丘、所以號粒丘、天日捨命、從韓國度來、到於宇頭川底、而乞宿處、於葦原志舉手命曰、汝爲國主、欲得吾所宿之處、志舉即許海中、爾時客神以劍攪海水、而宿之、主

神即畏客神之盛行、而先欲占國、巡上到於粒丘、而喰之、於此自口落粒、故號粒岡。其丘小石皆能似粒。又以杖刻地、即從杖處寒泉涌出、遂通南北、北寒南温、生白木。神山此山在石神、故號神山。生椎子八月熟。

揖保里。現今の揖保村にして、又粒岡は字揖保上村の北方に在り

出水里土中此村出寒泉、故因泉爲名。美奈志川、所以號美奈志川者、伊和大神子、石龍比古命、與妹石龍比貴命二神、相競川、妖神欲流於北方越部村、妹神欲流南方泉村、爾



時妹神、踰爾山岑、而流下之、妹神見之、以爲非理、卽以指櫛塞其流水、而從嶺邊、關溝流於泉村、搭爾妹神復到泉底之川流、奪而將流於西方桑原村、於是妹神遂不許之、而作密樋、流出於泉村、之田頭由此川、水絕而不流、故號無水川

出水里。現今の半田村及び揖西村の一部の地方なるべく同地には清水の大字あり、之れ出水の轉訛に由らざるか。

桑原里舊倉見里土中上品太天皇、御立於槻折山、覽之時森然所見倉、故名倉見村、今改名

爲桑原。一云、桑原村主等、盜讚容郡按、見將來、其主認來、見於此村、故曰按見。琴坂、所以號琴坂者、大帶日古天皇之世、出雲國人、息於此坂、有一老與女子、俱作坂本之田、於出雲人、欲使感其女、乃彈琴令聞、故號琴坂、此處有飼豕石、形似雙六之綵。

桑原里。現今の揖西村地方にして同村大字桑原は住古桑原里の中心地なりしと思はる。

讚容郡

讚容郡、所以云讚容者、大神妹妹二柱、各競



占國之時、妹玉津日女命、捕臥生鹿、割其腹而、種稻其血、仍一夜之間生苗、即今取種、爾大神勅云、汝妹者五月夜殖哉、即去他處、故號五月夜郡。神名贊用都比賣命、今有讚容町田也。即鹿殺山、號鹿庭山、山四面有十二谷、皆有生鐵也、難波豐前於朝廷始進也、見顯人別部犬、其孫等奉發之也。讚容里、事與郡同土上中

讚容郡。現今の佐用郡にして、又讚容里は今の佐用村の地とす

吉川本名玉落川大神之玉落於此川、故曰玉落。今

云吉川者、稻狹郡大吉川、居於此村故曰吉川、其山生黃連。按見、佐用都比賣命、於此山得金、按、故曰山名金肆、川名按見。伊師即是按見之河上、川底如床、故曰伊師、其山生精鹿升麻。速湍里土上中依川湍速名爲。速湍社坐神、廣比賣命故那都比賣弟。凍野、廣比賣命占此土之時、凍氷、故曰凍野凍谷。

吉川里。現今の江川村、平福村の地を指すものとす。速湍里。今の西庄村、久崎村地方にして久崎村早瀬は其速湍なるべし

邑寶里土中彌麻都比古命、治井滄糧、即云



吾占多國、故曰大村。治井處、號御井村。歛柄川、神日子命之歛柄、令採此山、故其山之川號曰歛柄川。室源山、屏風如室、故曰室源。生人參、獨活、藍、漆、升麻、白木、石灰。久都野、彌麻都比古命告云、此山踰者可崩、故曰久都野、後改而云宇努。其邊為山、中央為野。

邑寶里。現今の赤穂郡北部赤松村に當るが如しと云ふ者あれども、確然たる考證なきを以て直ちに左擔すること能はず

柏原里。由柏多生號為柏原。筌戶、大神從出雲國來時、以嶋村岡、為吳床坐、而筌置於此

川、故號筌戶也。不入魚而入鹿、此取作鱠、食不入口而落於地、故云此處遷他。

柏原里。現今の中安村に當り又嶋村岡は大字中嶋の古名なるべし

中川里上土中所以名仲川者、苦編首等遠祖大仲子、息長帶日賣命、度行於韓國之時、船宿淡路石屋、之爾時風雨大起、百姓悉濡、干時大仲子、以苦作屋、天皇勅云、此為國富、即賜姓、為苦編首、仍居此處、故川號仲川里。船引山、近江天皇之世、道守臣、為此國之宰、造官船、於此岑引、故曰船引、此山住鵲。一云韓



國鳥栖枯木之穴、春時見、夏不見、生人參細辛。昔近江天皇之世、有丸部具也、是仲川里人也、此人買取河內國免寸村人之寶劍也、得劍以後、舉家滅亡、然後苦編部大猪、圃彼地之墟、土中得此劍、土與相去廻壹尺許、其柄朽失而、其及不澁、光如明鏡、於是大猪卽懷恠心、取劍歸家、仍招鍛人、令燒其及、爾時此劍屈伸如蛇、鍛人大驚、不營而止、於是大猪以爲異劍、獻之朝廷、後淨御原朝廷、甲申年七月、遣曾根連磨、返送本處、干今安置此

里御宅。此山之邊有李五根、至于仲冬、其實不落。彌加都岐原、難波高津宮天皇之世、伯耆賀漏、因幡邑由朝二人、大驕無節、以清酒洗手足、於是朝廷以爲過度、遣狹井連佐夜、召此二人、爾時佐夜、仍悉禁二人之族、赴參之時、屢清水中醋栲之中、有女二人、玉纏手足、於是佐夜恠問之、答曰、吾是服部彌蘇連、娶因幡國造阿良佐加比賣生子、宇奈比賣、久波比賣、爾時佐夜驚之、此是執政大臣之女、卽還送之、所送之處、卽號見置山。所溺之



處、即號美加都岐原。

中川里。現今の徳久村にして、又淨御原天皇とは天武天皇なり即ち天皇は大海人皇子と稱し、飛鳥淨見原宮にて位に即かる仍て淨見原天皇と號す。  
彌加都岐原、今日の三日月村の地を指稱す。

雲濃里中土上大神之子、玉足日子玉足比賣生子大石命、此子稱於父心、故曰足怒。鹽沼村、此村出海水、故曰鹽沼村。

雲濃里。幕山村及び西庄村を指したるが如く、現今西庄村大字字根は之れ雪濃の轉訛にはあらざるさか。

完禾郡

完禾郡、所以名完禾者、伊和大神國作堅了以後、堺此谷尾、巡行之時、大鹿出己舌、遇於矢田村、爾勅云、矢彼舌在者、故號完禾鹿村、名號矢田村。

完禾郡。是れ現今の宍粟郡とす。

比治里上土中所以名比治者、難波長柄豐前天皇之世、分揖保郡、作完禾郡之時、山部比治住爲里長、依此人名、故曰比治里。宇波良村、葦原志許乎命、占國之時、勅此地小狹如室、故曰表戸。比良美村、大神之褶、落於此村、



故曰褶村、今人云比良美村、川音村。天日槍命、宿於此村、勅川音甚高、故曰川音村、庭音本名酒大神御糧、枯而生糲、即令釀酒、以獻庭酒、而宴之、故曰庭酒村、今人云庭音村。奪谷、葦原志許乎命、與天日槍命二相奪此谷、故曰奪谷。以其相奪之由、形如曲葛。稻春岑、大神令春稻於此岑、故曰稻春前粟生味其糠飛到之處、即號糠前。

比治里。現今の城下、戸原の二村にして城下村には大字比地を存し、戸原村には大字宇原の地を残す。

川音村、今日の戸原村川戸を指すものなるべし。

高家里土中所以名曰高家者、天日槍命告云、此村高勝於他村、故曰高家。都太川、衆人不能得稱。鹽村、處々出鹹水、曰鹽村、牛馬等嗜而飲之。

高家里。現今の葛澤村なるへしと云ふ、又本書鹹水云々と記すと雖本村には之れに因める地なく、隣村菅野村には鹽田の大字を見る。

柏野里土中所以名柏野者、柏生。天日槍命占國之時、有嘶馬、遇於此川、故曰伊奈加川。土間村、神衣附土上、故曰土間。敷草村、敷草



爲神座、故曰敷草。此村有山、南方去十里許、有澤二町許、此澤生菅、作笠最好、生梔粉、栗、黃連、葛等、生鐵、住狼羆。飯戶阜占國之神、炊於處、故曰飯戶阜、阜形亦似槽箕竈等。

柏野里。是れ現今の三河、土萬、千種の總稱にして其土間は土萬村敷草は千種村の地に相當す。

安師里酒加里土中上 大神喰於此處、故曰須加。後號山守里、所以然者、山部三馬、住爲里長、故曰山守。今改名爲安師者、因安師川爲名、其川者因安師比賣神爲名。伊和大神、將

娶誂之、爾時此神固辭不聽、於是大神大瞋、以石塞川源、流下於三形之方、故此川少水。此村之山、生梔粉、黑葛等、住狼熊。

石作里伊和本名土下中所以名石作者、石作首

等、居於此村、故庚申年爲石作里。阿和賀山、伊和大神之妹、阿和加比賣命、在於此山、故曰阿和加山、伊和麻川、大神占國之時、烏賊在於此川、故曰烏賊間川。雲筒里土下大神之妾、許乃波奈佐久夜比賣命、其形美麗、故宇留加。波加村、占國之時、天日梓命、先到



處、伊和大神後到、於是大神、大恠之云、非、度、先到之手、故曰波加村。到此處者、不洗手足必雨。其山生梳粉、檀、黑葛、山薑等、住狼熊。

安師里。此里は現今の安師、河東、富栖の諸村にして、須加の名は河東村に、安師は又安師村に安志の大字を存す

石作里。神野村、山崎町等にして、神野村には五十波の大字あり

雲筒里。之れ神戸村を始め西谷、奥谷の各村にして、神戸村には今聞賀の地あり、又同村には國幣中社伊和神社ありて播磨一ノ宮と稱す。

御方里上下所以號御方者、葦原志許乎命、與天日槍命、到故黑志介嵩、各以黑葛三條、

著足投之、爾時葦原志許乎命之黑葛、一條落但馬氣多郡、一條落夜夫郡、一條落此村、故曰三條。天日槍命之黑葛、皆落但馬國、故占但馬伊都志地、而在之。一云、大神爲形見、植御杖於此村、故曰御形。大内川、小内川、金内川、大者稱大内、小者稱小内、生鐵者稱金内。其山生梳林、黑葛等、住狼熊。伊和村、本名神酒大神釀酒此村、故曰神酒村。又云於和村、大神國作訖以後、云於和等、於我美岐。

御方里。現今の染河内、下三方、三方、繁盛の四ヶ村にして、三方村には



三方町の大字存し御形神社ありて伊和大神御杖植の地と稱す。

伊和村、今神戸村に属し伊和の大字を存す。

神前郡

神前郡、右所以號神前者、伊和大神之子、建

石敷命、山使村於神前山、乃因神在爲名、故

曰神前郡。

神前郡。現今の神崎郡にして中世神東神西の二郡に分たれしを明治廿九年合して一郡となる。

聖岡里生野、大川内、湯川、粟土下下所以號聖岡者、

昔大汝命、與小比古尼命、相爭云、擔聖荷而

遠行、與不下尿而遠行、此二事何能爲乎、大汝命曰、我不下尿欲行、小比古尼命曰、我持聖荷欲行、如是相爭而、行之數日、大汝命曰、我不能忍行、即坐而下尿、之爾時小比古尼命咲曰、然苦亦、擲其聖於此岡、故號聖岡、又下尿之時、小竹彈上其尿、行於衣、故號波自加村。其聖與尿成石、于今不亡。一家云、品太天皇巡行之時、造宮於此岡、勅云、此土爲聖耳、故曰聖岡。所以號生野者、昔此處在荒神、半殺往來之人、由此號死野、以後品太天皇



勅云、此爲惡名、改爲生野。所以號粟鹿川内者、彼自但馬阿相郡粟鹿山流來、故曰粟鹿川内、生榆。大川内因大爲名。生榆、杉、黑葛、又、俗人卅許口。又有異湯川、昔湯出此川、故曰湯川。在異俗卅許口。

聖岡里。川邊村大字屋形以北の各村即ち粟賀村、大山村、寺前村、長谷村、鶴居村及び但馬國生野町等を指したるものにして其波自加村は屋形村字初鹿野の地なるべく、生野は朝來郡生野町にして、粟鹿川内は粟鹿村の地、又大川内及び湯川は寺前、長谷の地なるべし、今寺前村大字に大河の稱あると其稍南鍛冶の字に大川内と呼ぶ所あり此れ全く大川内の地とす。亦粟鹿川内の條に彼自但馬阿相郡粟鹿山流來故曰粟鹿川内とあるも是れ當時編者の誤にて粟鹿山の流れと本村とは全く其方位を異にせり。

川邊里 勢賀川 砥川山 土中下、此村居於川邊、故號川邊里。所以云勢賀者、品太天皇、狩於此川内猪鹿多、約出於此處殺、故曰勢賀。所以云砥川山者、彼山砥、故曰砥川山。至于星出狩殺、故山名星肆。

川邊里、現今の川邊村、瀬加村、田原村の地にして、其川邊は川邊村、勢賀は瀬加村の地を指稱す、今川邊村は東西川邊の大字を存す

高岡里 神前山 奈具佐山 土中中、右云高岡者、此里有高岡、故號高岡。神前山與上同。奈具佐山 生、不知其由。多馳里 邑曰野、八千 軍野、梗岡 土中下所以號多馳者、



品太天皇巡行之時、大御伴人、佐伯部等始祖、阿我乃古、申欲請此土、爾時天皇勅云、直請哉、故曰多馳。所以云邑曰野者、阿遲須伎高日子尼命神、在於新次社、造神宮於此野之時、意保和知、荊廻爲院、故云邑曰野。梗岡者、伊和大神與天日杵命二神、各發軍相戰、爾時大神軍、集而春稻之、其梗聚爲丘。一云、掘域處者、品太天皇御世、參度來百濟人等、隨有俗、造城居之、又其篋置梗云墓、又云城牟禮山、其孫等川邊里三家人、夜代等。所以

云八千軍者、天日杵命軍在八千、故曰八千軍野。

高岡里。現今の福崎村甘地村一帯の地にして福崎村に高岡の大字あり。

奈具佐山、之れ高岡の宇田口の北方に聳ゆる七種山にして山中七種の瀧あり、又神崎山は同村山崎の後の山にして、本文中山使村とあるは此の山崎を指したるものとす。

多馳里。現今の船津、八千種、山田の各村にして船津村御立は之の多馳の轉訛なるべく、又八千軍野は八千種村の古名なり。

邑曰野、是れ現今の西光寺野なるべく、其新次社は豊富村字曾坂にある神社とす。

蔭山里蔭山 土中下、云蔭山者、品太天皇御蔭墮於此山、故曰蔭山、又號蔭岡。爾除道又



鈍、仍云磨布理許、故云磨布理村。  
云胄岡者、伊與都比古神、與宇智賀久牟豐  
富命相鬪之時、胄墮此岡、故胄岡。

蔭山里。現在の豊富村一帯にして、村の西北部市川に沿ひ一孤丘あり之れを甲山と稱し、山上應神天皇を祀れる郷社甲八幡社あり。

的部里石座神山高野社土中中、右的部等居於此村、  
故曰的部里。云石坐山者、此山戴石、又在豐、  
穗命神、故曰石坐神山。云高野社者、此野高  
於他野、又在玉依比賣命、故曰高野社。  
社生槐

的部里。現今の中寺村岩部は其古名にして即ち的部の地は其岩部附近より起り中寺、香呂及び砥堀村大字仁豊野等を統べたるに似たり。

### 託賀郡

託賀郡右所以名託賀者、昔在大人常勾行也、自南海到北海、自東巡行之時、到來此土云、他土卑者、常勾伏而行之、此土高者、伸而行之、高哉、故曰託賀郡。其踰迹處、數々成沼。

託賀郡。即ち現今の多可郡なり。

賀負里大海山土下上、右因居川上爲名。所以



號大海者、昔明石郡大海里人、到來居於此山底、故曰大海山。生松。所以號荒田者、此處在神、名道主日女命、無父而生兒、爲之釀盟酒、作田七町、七日七夜之間、稻成熟、意乃釀酒集諸神、遣其子捧酒、而令養之、於是其子向天、目一命、而奉之、乃知其父、後荒其田、故號荒田村。

賀負里。中村以北即ち中村、松井庄、杉原谷の總稱にして荒田は今の中村大字安樂田にして荒田神社あり、又中村附邊に雷神の社と云ふ小祠あり之れ本書中にある天目一神を祀れる所なりと云ふ。

黒田里。袁布山、支開岡、大羅野。土下上、右以土黒爲名。云袁布山者、昔宗形大神與津嶋比賣命、妊伊和大神之子、到來此山、云我可産之時訖、故曰袁布山。支開丘者、宗形大神、云我可産之月盡、故曰支開丘。云大羅野者、昔老夫與老女、張羅於袁布中山、以捕禽鳥、衆鳥多來、負羅飛去、落於件野、故曰大羅野。

黒田里。現今の黒田庄村の地を継し、其大字喜多は支開丘にして大伏は袁布山の轉訛せしものに非らずやと云ふ。

都麻里。都多伎、比也山、比也野、鈴堀山、伊夜丘、阿富山、高瀬、自前、和爾布多岐、阿多加野。土下上、所



以號都麻者、播磨刀賣與丹波刀賣、堺國之時、播磨刀賣到於此村、汲井水而飲之、云此水有味、故曰都麻。云都太岐者、昔讚伎日子神、詔氷上刀賣、爾時氷上刀賣、答曰否、日子神猶強而詔之、於是氷上刀賣怒云、何故詔吾、即雇建石命、以兵相關、於是讚伎日子負而逃去、云我其怯哉、故曰都多岐。云比也山者、品太天皇狩於此山、一鹿立於前、鳴聲比々、天皇聞之、即止翼人、故山者號比也山、野者號比也野。鈴堀山者、品太天皇、巡行之時、

鈴落於此山、羅求不得、仍掘土而求之、故曰鈴堀山。伊夜丘者、品太天皇狩犬名麻奈志漏與猪走、上此岡、天皇見之、云射手、故曰伊夜岡。此犬與猪相關死、即作墓葬、故此岡西有犬墓。阿富山者、以枋荷家、故號阿富。云高瀬村者、因高川瀬為名。目前田者、天皇狩犬、為猪所打害目、故曰目割。阿多加野者、品太天皇狩於此野、一猪負矢、故為阿多岐、故曰阿多賀野。

都麻里。現今の津萬村比延庄村にして比也山比也野は比延庄の古



名なるべし、伊夜丘、比延村附近に狐塚と云ふ塚あり是れ伊夜丘の犬塚にあらずやと云ふ者あれども考證の材に乏し。

法太里花波坂土下上、所以號法太者、讚伎日子、與建石命、相鬪之時、讚伎日子、負而逃去、以手匍去、故曰匍田。甕坂者、讚伎日子逃去之時、建石命逐此坂云、自今以後更不得入此界、即御冠置此坂。一家云、昔丹波與播磨國界之時、大甕掘埋於此上、以為國界、故曰甕坂。花波山者、近江國花波之神、在於此山、故因為名。

法太里。現今の加西郡大和村芳田村及び本郡野間谷村重春村の地にして、加西郡芳田村は匍田の意なるべく、又花波山は重春村板波の古名にてはあらざるか。

加毛郡

加毛郡、所以號賀毛者、品太天皇之世、於鴨村雙鴨、作栖生卵、故曰賀毛郡。上鴨里、土上中、下鴨里、土中下、右二里號鴨里者、已詳於上、但後分為二里、故曰上鴨下鴨。所以品太天皇巡行之時、此鴨發飛、於居修布井樹、此時天皇問云、何鳥哉、待從當麻品遲部君



前玉、答云、住於川鳴、勅令射、時發一矢、中二鳥、即負矢、從山峯飛越之處、號鳴坂、落斃之處者、仍號鳴谷。羹羹之處者、號羹坂。下鳴里有碓居谷、箕谷、酒屋谷、此大汝命造碓、稻春之處者、號碓居谷、箕置之處者、號箕谷、造酒之處者、號酒屋谷。修布里中土中所以號修布者、此村有井、一女汲水、即被吸沒、故號曰修布。鹿咋山、右所以號鹿咋者、品太天皇狩行之時、白猪咋已舌、遇於此山、故曰鹿咋山。品遲部村、右号然者、品太天皇之世、品遲部

等遠祖、前玉所賜此地、故号品遲部村。

賀毛郡。是れ現今の加東加西の兩郡にして往時は又賀毛國とも稱したり。

上鳴里。現在の在田村西在田村にして在田村には今尙鳴谷の大字を存す。

下鳴里。今日の賀茂村、下里村の地方にして下里村牛居は碓井谷の轉訛なりと云ふ者あり。

修布里。富田村及び北條町等に至る地にして、富田村汲谷は此修布の里其品遲部村は現今の北條町を指したるものなり。

三重里中土中 所以云三重者、昔在一女、拔筠

以布裹食、重居不能起立、故曰三重。

三重里。下里村の一部に當らさるかと思ふ者あれども今確然たる考證なし。



櫛原里中土中所以號櫛原者、柞生此村、故曰  
 柞原。伎須美野、右號伎須美野者、品太天皇  
 之世、大仲連等、請此處之時、喚國造黑田別、  
 而問地狀、爾時對曰、縫衣如藏櫃底、故曰伎  
 須美野。飯盛嵩、右號然者、大汝命之御飯盛  
 於此嵩。故曰飯盛嵩。粳岡、右故粳岡者、大汝  
 命令春稻於下鴨村、散粳飛到於此岡、故曰  
 粳岡。玉野村所以號者、意奚袁奚二皇子等、  
 坐於美囊郡志深里高宮、遣山部小楯、詔國  
 造許麻之女根日女命、於是根日女、已依命

訖、爾時二皇子相辭不娶、于日間、根日女老  
 長逝、于時皇子等大哀、即遣小立勅云、朝日  
 夕日不隱之地、造墓藏其骨、以玉飭墓、故緣  
 此墓號玉丘、其村號玉野。

櫛原里。現今の九會、富合の兩村及加東郡來住村にして、其伎須美野は加東郡來住村に相當す。

飯盛嵩、富合村玉野新家の南方に當る山にして、此山の附近を飯盛野と稱し廣大の原野をなす。

玉野村、富合村大字玉野にして玉丘は水塚又は千壺等と稱し同地の田間にあり、瓢形の古墳にして周圍に濠を廻らし規模整然たり、明治十五六年の頃加東郡近藤某之れを發掘せんとし着手せしむ中途挫折せり、目下兵庫縣廳に於ては之れが保存方法を講究中なりと云ふ。



起勢里屍江土下中、右號起勢者、巨勢部等  
居於此村、仍爲里名。梟江、右號死江者、品太  
天皇之世、播磨國之田村君、在百八十村、君  
而已村別、相鬪之時、天皇勅、追聚於此村、悉  
皆斬死、故曰死江、其血黑流、故號黑川。  
山田里猪飼土中下、右號山田者、人居山際  
遂田爲里名。猪養野、右處猪飼者、難波高津  
宮御宇天皇之世、日向肥人朝戶君、天照大  
神坐舟、於猪持參來進、之可飼所求申仰、仍  
所賜此處、而放飼猪、故曰猪飼野。

起勢里。加東郡福田村を中心とし其附近を統べたる如く今同村に  
東古瀬、西古瀬、中古瀬の大字を存す。  
山田里。現今の市場、大部、小野等の地にして市場村には大字山田あり。

端鹿里土下今在其神、右號端鹿者、昔神於  
諸村、斑菓子、至此村不足、故仍云間有哉、故  
號端鹿、此村至于今、山木无菓子、生真木  
穗積里本名鹽野土下上、所以號鹽野者、鹹水  
出於此村、故曰鹽野。今穗積號者、穗積臣等  
族、居此村、故號穗積。小目野、右號小目野者、  
品太天皇巡行之時、宿於此野、仍望覽四方、



勅云、彼觀者、海哉、河哉、從臣答曰、此霧也、爾時宣云、大体雖見、無小目哉、故號云小目野。於是從臣等開井、故云佐々御井。又仍此野詠歌、宇都志伎乎米乃佐々波爾、阿良禮布理、志毛布留等毛、奈加禮曾稱袁米乃佐々波。

雲潤里中土右號雲潤者、丹津日子神、法太之河底、欲越雲潤之方云、爾之時在於彼村太水神、辭云、吾以突血佃、故不欲河水、爾時丹津日子云、此神倦堀河事云、爾而已、故號

雲彌、今人號雲潤。

端鹿里。東條川に沿へる地の總稱にして即ち上中下の三東條而して今上東條村に椅鹿谷の名の残れるは其證左たり。  
穂積里。現今の加茂村瀧野村社町一帶の地に於て、加茂村には穂積の大字を存す又小目野は今の米田村久米の地にあらざるかと云ふ者あり。

雲潤里。加西郡多可野村にして其和泉は之れ雲潤の轉訛とす。

河内里土中右田川爲名此里。之田不敷草下苗子、所以然者、住吉大神上坐之時、食於此村、爾從神人等、人蒞置草解散爲座、爾時草主大患訴、於大神判云、汝田苗者、必雖不敷草、如敷草生、故其村田、于今不草、作苗



代

河内里。加東郡上福田村、米田村等の地を指稱せるものにして昔時又河内郷と呼びしことありと云ふ。

川合里腹辟土中上。右號川合者、端鹿川底、與鴨川會村、故號川合里。腹辟沼、右號腹辟者、花浪之神之妻、淡海神、爲追己夫、到於此處、遂怨曠妾以刀辟腹、没於此沼、故号腹辟沼、其沼鮒等、今無五臟。

川合里。現今の河合村にして本書の端鹿川は即ち東條川にして、鴨は之れ加古川なりとす。

美囊郡

美囊郡、所以號美囊者、昔大兄伊射報和氣命堺國之時、到志深里許曾社、勅云、此土水流甚美哉、故号美囊郡。

美囊郡。現在の美囊郡にして又大兄伊射報和氣命とは履中天皇とす、天皇は諱を大兄伊射報別尊と稱し仁德天皇の皇子、在位六年にして崩御さる。

志深里土中所以号志深者、伊射報知氣命、御食於此井之時、信深貝遊上於御飯宮緣、爾時勅云、此貝者、於阿波國和那散、我所食之貝哉、故號志深里。於奚袁奚天皇等、所以



坐於此土者、汝父市邊天皇命、所殺於近江國、摧綿野之時、率日下部連、意美而逃來、隱於惟村石室、然然意美、自知重罪、乘馬等切斷其筋、遂放之、亦特物按等盡燒廢之、即經死之、爾二人子等、隱於彼是、迷於東西、仍志深村首、伊等尾之家所役也、仍伊等尾新室之宴、而二子等令燭、仍令舉詠辭、爾兄弟各相讓、乃弟立詠、其辭曰、多良知志伎、吉備鐵、使歛持如田打、手拍子等、吾將爲舞。又詠其辭曰、淡海者水隔國、倭者青垣々山投坐、市

邊之天皇、御足末、奴津良麻者。即諸人等皆畏走出、爾針間國之山門領所遣山部連小楯、相聞相見語云、爲此子汝母乎、白髮命晝者不食、夜者不寢、有生有死、泣戀子等、仍參上碱如右件、即歡哀泣、還遣小楯召上、仍相見相語戀、自此以後、更還下造宮於此土、而坐之、故有高野宮、少野宮、川村宮、池野宮、又造倉之處、即號御宅村、造倉之處號御倉尾。高野里、坐於祝田社神、玉帶志比古、大稻女、玉帶志比賣、豐稻女。志深里坐於三坂社神、



八戸掛須御諸命、大物主葦原志許、國堅以後、自天下於三坂峯

志深里。現今の志深村、淡河村の地にして志染村大字窟屋は即ち億計、弘計二皇子の隠れさせ給へし地なり億計弘計は市邊押磐尊(尊は履中帝の御孫なりしが安楽天皇即位三年十二月近江國來田綿野に於て雄略天皇のために殺さる)の皇子にして清寧帝(白髮皇子と稱す)子なきを以て億計王を立てて皇太子とし、弘計王を以て皇子とす、帝在位五年にして崩御さる仍て弘計王位に即く之を顯宗天皇となす、天皇位に在ること三年壽三十八を以て崩御あり、爰に於て億計王位に即く之を仁賢天皇となす、天皇在位十一年壽五十を以て崩御さる。

祝田社。本郡別所村に在りしものにて今同村大字には遺田の地あり。

三坂社。三坂は今志染村御坂の地にして井上、戸田の中間に當る部

落とす。

吉川里。所以號吉川者、吉川大刀自神、在於此、故云吉川里。

吉川里。現今の細川村及び奥中、口の三吉川の總稱とす。

枚野里、因體爲名。

枚野里。現今の久留美村の地にして同村の大字平田は或は枚野の轉訛したる者にあらずやと云ふ。

高野里。因體爲名。

高野里。即ち別所村、三木町等の地にして高野里祝田社云々あるを以て其大体を知ることを得べし



播磨風土記終

大正十年七月廿五日印刷

〔非賣品〕

大正十年八月廿七日發行

發行人

兵庫縣神崎郡粟賀村福本百四拾五番屋敷

藤本政治

印刷人

兵庫縣神崎郡粟賀村福本百四拾五番屋敷

吉田善太郎

11  
484



終

